



## 東和中学校の『学び合い』から学ぶ

今回、東和中学校の「学び合い」の授業とその研究内容を現教の機会を通じて学ぶことができました。せっかくですので、その振り返りを行いたいと思います。学びの共同体を研究してきた立場ではないので、あくまで私見ですが職員の方々と振り返られればと思います。

まず、今回の研究内容を結論的に言うと、東和中学校が抱えている課題に沿って、学校を変革させた素晴らしい実践だと思っています。ただ、これを全て本校で取り込んだからと言って、同程度の成果が得られるかということそうではないと思います。そもそも抱えている課題が違うので、その点を考えた上で取り込んでいく必要があると感じました。

では、改めて何が良かったのか、また本校でも取り入れていくといいと考えられることは何なのかを述べたいと思います。

### ①全教職員が同じ方向を向いて研究を推進できた。

荒れた学校を立て直すためには、まず教職員が一体となることが一番大事なことです。でも、つい生徒指導に目を向けがちになり、授業がおろそかになるのが荒れた学校の陥りやすいところだと思います。授業を立て直すという、前向きな改革が大きく立て直すきっかけになると思います。逆に、落ち着いた学校はついあぐらをかいてしまい、教員が同じ方向を向いていないことがあります。東中学校がその状況に陥らないためにも、方向性をしっかり持ち進めていくことが学力の向上につなげていくことができると感じました。

### ②学習ルールがしっかりと根付いている。

1年生で、あれだけ東和中学校ルールができあがっていることには驚きました。短時間でのグループ編成。グループの机がぴったりとくっついている。そのために、机の袖には荷物を掛けていない。発表の時の姿勢。指示棒を使ったり、パウポを自在に示したり、原稿を見ずに堂々と発表できる姿。何年か掛けてやっと育てられることが、たった2ヶ月で作られていることにはびっくりです。これは、多分学校全体が同じ指導をし、継続的に指導を続けていることがこの結果に結びついているのだと思います。これは、先生方でしっかりと学習ルールが共通理解できていることが必要でしょう。

### ③教員の指導の基本ができている。

馬場先生が、指導講評で言っていましたが、先生の「穏やかな言葉」や「発言を促す言葉」「教師の立ち位置」など、学び合いによって為される教師の立ち居振る舞いのように述べていましたが、教師としてしごく当たり前の姿勢ですよ。野口芳宏氏や向山洋一氏などこれまでの先人の教師たちが、これらのことは当たり前のように言

っていました。ただ、当たり前を強く伝えてこなかったがために、実際にはできていない教師が多いのだと思います。(残念ながら中学校教員の方がその意識は低いと感じます。) 改めて、先人の教師たちが述べている本を読み、立ち居振る舞いを見直してみることもいいのかもしれない。

#### ④授業が基本的構造に則っている。

これは、これまでも私が言い続けていますが、「導入→展開→まとめ」が明確にできていたと言うことです。特に、導入場面で馬場先生も言っていましたが、復習から始まるのではなく、興味関心を抱きやすい動画から始まっています。そのことを受け、課題設定。課題解決のための学び合い。そしてまとめにつながっていました。また、モニターと板書の関係もうまくできていました。モニターはあくまで資料提示のためのもの。板書は、学習の流れを残す足跡になるよう構成されていました。このあたりのことは、今後の通信で詳しく伝えようと思いますが、子供の思考の流れを板書に残すことは、授業の終末に振り返りを行うためにはとても大事なものになるのです。

#### ⑤ワークシートの考え方

ワークシートに対する考え方が、本来あるべき姿を物語っていたと思います。ワークシートを見てみると、虫食いの問題集みたいなワークシートを見かけることがあります。本来、ワークシートとはそういうものではありません。以前、県教委の局長がうまく表現したことがありました。「ワークシートに頭がワークする場面のないものはワークシートではない。」と言いました。子供が自分の考えを書き記すためのものがワークシートです。なので、自分の考えを消して他人の答えを書くものではありません。授業者が、友達の良い意見はペンの色を変えて書き加えましょう。と言う助言は、本来のワークシートのことを知っているからこそその発言だと思います。

ここまで述べてきた①～⑤のことは、本当にいい見本になったと思います。本校も、少しでも見習い、研究の推進につなげていけるようになればと感じました。

逆に、東和中学校の学び合いとは違い、東中学校の学び合いの方向性を探りたいと思います。今回の授業を見て、東中学校としての学び合いはどうあるべきか、以下に示したいと思います。

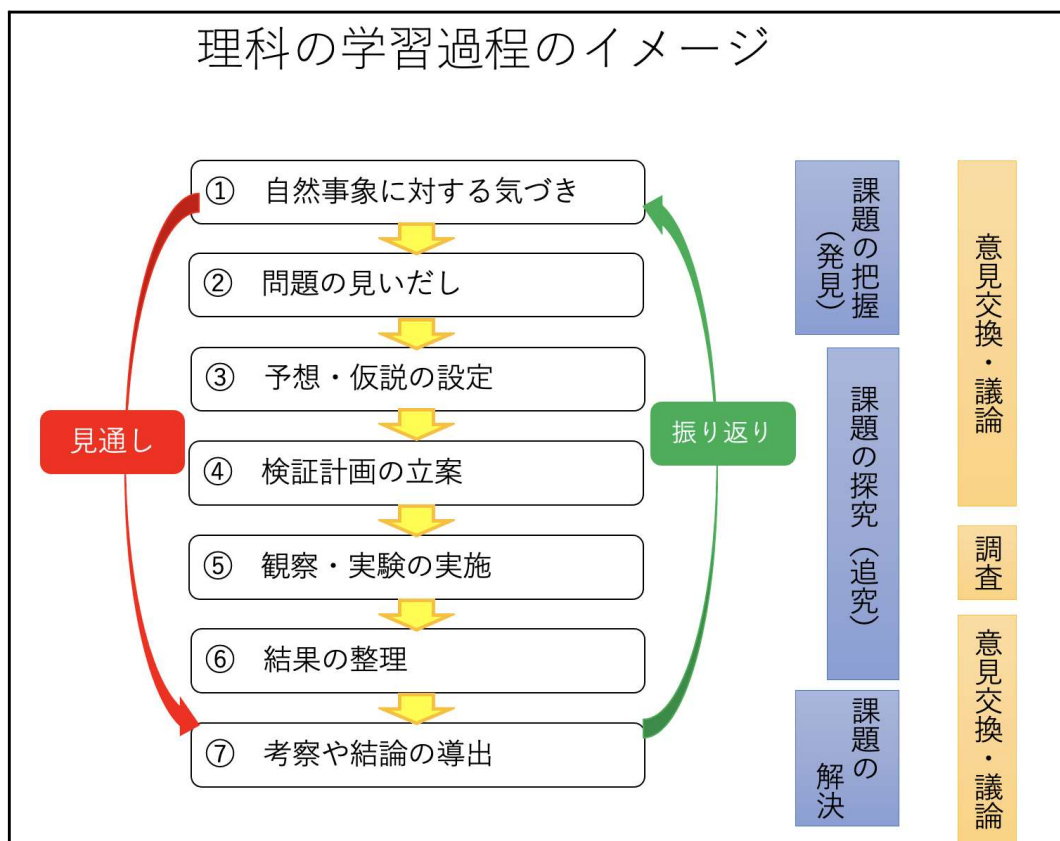
#### ①めあてと学習のゴールを明確にする。

今回の授業は、めあてが不明確でした。課題は提示していましたが、めあてではないのでゴールが見えませんでした。そのために、今回の授業で、子供たちにつけたい力は何だったのかがわかりませんでした。ペルーのことを考えるのか、高地の特徴を考えるのか、結局はわからなかったと思います。これまでの通信でも述べてきましたが、ゴールをはっきりさせておけば、それまでの道筋もみえてくるはずでした。その点が不明瞭だったのが残念です。我々としては、改めて「めあて」と「まとめ」の関係の重要性が再認識できたと思うので、授業づくりの骨格に位置づけて欲しいと思います。研究授業という観点から手段(学び合いの手法)が目的になってしまっていたのが残念です。

#### ②課題解決学習としての深い学びを追究する。

社会科も理科も基本、課題解決学習だと言えます。今回も課題が提示されそれを解決するように授業が進められていました。ただ、今回主たる課題に対し、1時間の間

で3つの課題が出され、そのことについて自力解決に臨んでいたように思います。今回はこの課題が順番にステップアップできていなかったので、思考が深まっていったようには見えませんでした。学ぶ姿勢は身につくかもしれませんが、深い学びとは少し違うように思います。今回の授業形態が「学び合い」の本筋だったのかどうかはわかりませんが、今回の授業だけを見るとその点は残念だったように思います。課題解決学習とは、課題設定があり、その課題をどうやって解決すればいいのかを考えます。その時、その課題に対する仮説を立て、実際に検証していきます。検証結果を踏まえて結論に結び付けていく。というのが流れだといえます。ちなみに理科では、学習指導要領に学習過程のイメージが例示されているのでそれを示します。(小学校版)



この図にも示されている通り、観察・実験(調査)を前後に挟んでいる、「予想や検証計画」「結果や考察」の場面で思考を深めると効果的と示されています。深い学びを求めるには、1つの学習過程の中での的を絞ることが大切だと言えるでしょう。深い学びの場面にしっかりとつなげていけるように、子どもに正確な情報を与えてあげることが、基礎学力の定着にもつながり、思考の深まりにもつながっていくのだと思います。結論から言いますと、深い学びの場面はしっかりと的を絞って設定することが、知識・理解も思考力も身につけさせることができるのだと思います。

### ③グループ学習の基本

グループ学習の基本については、今回の研究授業が参考になります。まずは型が大切です。1班、3人から4人の班を形成する(本来は男女バランスも半分ずつがよいとされています)。グループの机はしっかりとくっつけて話しやすい体制を作る。グループは速やかに作れるように備えておく。といったことがすべての教科で整えられていると、授業内でのタイムラグが生じずに円滑に進めていくことができます。そして、

グループ活動に入るときは、必ず個人思考から始まり、集団思考につなげていくことが大事です。今回も個人思考が取り入れられていました。その時にいわゆる学びあいを取り入れてもいいと思います。問題は、そのあとの集団思考です。いかに、多様な考えを共有できるか。また新たな考えに結び付けていくか。どうまとめていくのかが、集団思考に求められていると思います。この場面が、深い学びにつなげられていくと考えられますので、一番の工夫点となるでしょう。

#### ④GIGAスクールをどう「学び合い」に取り入れるのか

本校の研究テーマに、「GIGA スクールの効果的活用の促進を目指して」となっています。タブレットをどのように学び合いに取り入れていくのか、そこがキーポイントになってくると思います。課題解決学習で考えると、「調査」のツールとしてタブレットを活用することも考えられます。また、個人思考のワークシートとして、そしてその共有のためのツールとしても利用が考えられます。今回の研究授業では、タブレットの使用はなかったのですが、これからいろいろな実践を見ることができるよう。一つ一つを参考にしながら、まずはやってみることを心掛け、取り組んでいくことも大事な1歩に感じます。

#### ⑤授業の基礎・基本を徹底する。

最後に、「主体的・対話的で深い学び」を推進するにあたって、「学び合い」は大変重要なポジションにあると思います。もちろん、積極的に取り入れ、推進していくことが大事なことでありますが、不易な部分を丁寧に進めていくことを基盤にした授業をするからこそ、ジャンプの課題が生きていくのだと考えます。これまでも通信を通じて示してきましたが、「不易と流行」のバランスを取りながら、授業を進めることがやっぱり一番大事だと思います。これからも、様々な事例を紹介できればと思いますので、東中学校としての研究が一層進めていくことができるよう今後も研究を進めていきたいと思います。

・・・ to be continued ・・・

参考文献：「授業の腕を上げる法則」向山洋一 著（明治図書）

「野口流 授業の作法」野口芳宏 著（学陽書房）

